

七十人訳聖書における kalos の使用法について

早藤 史恵

同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

要旨

マルコ 14 章 3-9 節、マタイ 26 章 6-13 節に記される「イエスに香油を注いだ女」の物語で、イエスは女の行為に対し「わたしに良いことをしてくれたのだ」と告げる。一般に、ギリシア語で「良い」を表す語は agathos や kalos である。この物語では、両福音書とも、kalos が使われている。

kalos は古典ギリシア語においては、主に美しさを指すことばであり、非常に重要な意味を持つ。一方、七十人訳聖書においては、耽美的な側面が退くとともに、そのことばの持つ意味合いも、古典ギリシアほどの重要性はないといわれてきている。

本稿では、七十人訳聖書における kalos の使用法を探ることにより、従来の語義的説明の妥当性を再検討し、kalos の持つ意味の広がりや深さについて論考する。その中で、同義語である agathos との違い、kalos と「真」、「神の喜び」との関係を明らかにし、さらには、七十人訳聖書における kalos の重要性にも言及する。これらを通して、上掲の物語を解釈する手がかりをつかむ。

キーワード

七十人訳聖書、kalos、agathos、真、神の喜び

The Usage of *kalos* in the Septuagint

Fumie Hayafuji
Doctoral Student
Graduate School of theology, Doshisha University

Abstract:

In the story “A Woman who Anoints Jesus” (MK14:3-9, MT26:6-13), Jesus says, “She has done a good thing to me.” Generally speaking, in Greek, the words which denote “good” are *agathos* and *kalos*. In this story, *kalos* is used.

In the ancient Greek, *kalos* is the word which mainly means “beauty,” and it has a very important meaning. On the other hand, in LXX, they say that the aesthetic aspect is not emphasized; moreover the meaning and the role of the word becomes less important.

In this thesis, I review the usual semantic explanations by studying the use of *kalos* in LXX, and I argue about the extent and depth of the meaning of *kalos*. I reveal how *kalos* differs from *agathos*. I also expand the relationship between the word *kalos* and “truth” and “joy of God.” Moreover, I refer to the importance of *kalos* in LXX. From this, I look for clues to interpret the story.

Keywords:

Septuagint, *kalos*, *agathos*, truth, joy of God

はじめに

マルコ 14 章 3-9 節、マタイ 26 章 6-13 節には、受難を前にしたイエスの頭に、一人の女が高価な香油を注ぎかける物語が記されている。その女の行為に対し、弟子たち（マタイ）や人々（マルコ）は憤慨し、それが無駄遣いであるとして彼女を厳しくとがめる。一方、イエスは「わたしに良いことをしてくれたのだ」と告げる。一般に、ギリシア語で「良い」を表す語は *agathos* や *kalos* であるが、この物語においては、両福音書とも、*kalos* が使われている。

古典ギリシア語において、*kalos* は、主に「美しい」ことを指す語である。「美」に価値を置くギリシア思想や哲学では、*kalos* は非常に重要な意味を持つことばである。一方、七十人訳聖書（以下 LXX と記す）においては、*kalos* の審美的な側面は退き、その用語の果たす役割は、古典ギリシア語におけるほど重要ではないと、辞書や注解書等によりしばしば説明がなされてきた。

本稿では、LXX における *kalos* の用法を探ることにより、従来の語義的説明の妥当性を再検討する。まず *tôb*、*yāpeh* などの翻訳として使用される *kalos* が、どのような箇所、またどのように使用されているのかについて、同義語である *agathos* との対比も交えて考察していく。その中で、*agathos* の用法との違いについても触れる。

さらに、LXX に特徴的な *kalos* の用法を明らかにし、また、その意味の広がりや LXX における *kalos* の役割の重要性についても論考する。その上で、上掲の物語を解釈する手がかりをつかむ。

1. 古典ギリシア語における *kalos* について

1-1. 語源

kalos の語源は、サンスクリット語の *kalja*（健全な、強い、優れた）にあるとされる。*kalos* のもともとの語義は、「ふさわしい」、「役に立つ」、「健全な」である。やがて、審美的に「美しい」という意味をもつようになり、その後、「(道徳的に) よい」という意味をもつようになった¹。

1-2. 古典ギリシア文学における *kalos*

Liddell&Scott の *A Greek-English lexicon* では、*kalos* の語義は、概して次のように記されている。

- 1) 美しい
- 2) 良い、質が良い
- 3) 高貴、賞賛に値する²

1) においては、kalos は主に外観の美しさを表し、しばしば人に使用される。良い魂と「美しい」身体 (Xenophon『ソクラテスの思い出』2・6・30) というように使われる。また、kalos はしばしば体の部分の美しさを表す。さらに、人だけでなく、庭や着物、盾などものにも使われる。また、呼称に用いて愛や賞賛を表す。

2) では、kalos は有用性や質の良さを示している。「よい」港 (Homerus『オデュッセイア』6・263)、「偽物でなく、混じりけのない、純」銀 (Xenophon『ソクラテスの思い出』3・1・9) というように使われる。

3) においては、kalos は、道徳的意味で使用される。「立派な」こと (Xenophon『ソクラテスの思い出』3・5・28)、「美」とは何か、醜さとは何か (Xenophon『ソクラテスの思い出』1・1・16)³。

また kalos が、同義語の agathos と共に結び合わされたものが kalos kagathos であり、それは、教育や人生の理想を表すことばとして用いられる⁴。

さらに、Plato の『パイドロス』は、「一美について」と副題がつけられていることからもうかがえるように、何度も kalos が使用されている。その数は kallos (名詞)、kalōs (副詞) の他、合成語を含めると 70 回近くにもものぼる。Plato は『パイドロス』の中で、「人がこの世の美を見るとき、かの世での真実在、すなわち真実の<美>を思い起す」⁵という。ここでは、kalos が神的世界と地上の世界とを結び付け、人生の意味を与えるものとして捉えられている⁶。以上のように、kalos は古代ギリシアの教育や思想、哲学において非常に重要な語である。

2. LXX における kalos

2-1. LXX における kalos

古代ギリシアにおいて重要な意味を持ち、また使用頻度の高い kalos ではあるが、LXX になると、kalos の使用回数は激減する。

Grundmann は「ギリシア思想という見地から考えれば、われわれは、第一に、LXX において kalos の役割が乏しくなっているということに驚く」⁷と述べる。同義語の agathos の使用回数が 612 回であるのに対し、kalos は 221 回と、agathos の半分以下になっている。このように使用回数の減少という点において、kalos の役割は貧弱になっているといえよう。ところで、使用回数の減少に伴い、意味内容や役割そのものも、乏しくなったのであろうか。

そこで、以下、LXX における kalos の使用法を概観したのち、主に tōb や yāpēh の翻訳として使用されている kalos を取り上げ、agathos との対比も交えながら、文脈においてその語がどのように使用されているのかを考察することにする。

なお、本稿では、ヘブライ語聖書原文テキストとして、*Biblia Hebraica Stuttgartensia* を、LXX には Rahlfs 版を用いる。日本語訳は、基本的に新共同訳聖書を使用する⁸。

2-2. ヘブライ語聖書の内容と kalos との対応

Kalos が対応しているヘブライ語聖書のことばには、*ḥ^amûdôṭ*、*ṭôḇ*、*yāpeh*、*yāšār*、*kāḇôḏ*、*nā'weh*、*nā'im* がある。以下に、それぞれのことばが使用されている箇所を挙げる。

ḥ^amûdôṭ

リベカは、家にしまっておいた上の息子エサウの晴れ着を取り出して、下の息子ヤコブに着せ（創 27:15）

MT: wattiqqaḥ riḇqāh 'eṭ-bigdê 'ešāw b^enāh haggādōl haḥ^amudōṭ 'ašer 'ittāh
babbāyit wattalbēš 'eṭ-ya^aqōḇ b^enāh haqqātān:

LXX: kai labousa Rebekka tēn stolēn Ēsau tou huiou autēs tou presbyterou
tēn kalēn, hē ēn par' autē en tō oikō, enedysen lakōb ton huion autēs
ton neōteron

ṭôḇ

その金は良質であり、そこではまた、琥珀の類やラピス・ラズリも産出した。（創 2:12）

MT: ûz^ahaḇ hā'āreš hahiw' ṭôḇ šām habb^edōlah w^e'eḇen haššōham:

LXX: to de chryson tēs gēs ekeinēs kalon; kai ekei estin ho anthrax kai
ho lithos ho prasinos.

yāpeh

レアは優しい目をしてしたが、ラケルは顔も美しく、容姿も優れていた。（創 29:17）

MT: w^e'ēnē lē'āh rakkōṭ w^erāḥēl hāy^eṭāh y^epaṭ-tō'ar wīpaṭ mar'eh:

LXX: hoi de ophthalmoi Leias astheneis, Rachēl de kalē tō eidei kai hōraia
tē opsei.

yāšār

あなたは主が正しいと見なされることを行うなら、罪なき者の血を流した罪を取り除くことができる。（申 21：9）

MT: w^e attā t^eba'ēr haddām hannāqī miqqirbekā kī-ta'āsheh hayyāšār b^e ēnê yhwh:

LXX: sy de exareis to haima to anaition ex hymōn autōn, ean poiēsēs to kalon kai to areston enanti kyriou tou theou sou.

kābôd

ターバンのように丸めてまりを作り 広大な地へ放り出される。そこでお前は死に そこに、お前の誇る馬車も捨てられる。主人の家に恥をもたらす者よ。
(イザヤ 22:18)

MT: šānôp yišnāp^ekā š^enēpāh kaddûr 'el-'ereš rah^abaṭ yādāyim šāmmā tāmût
w^ešāmmā mark^ebôt k^ebôdekā q^elôn bêt 'aḏōnêkā:

LXX: kai ton stephanon sou ton endoxon kai rhipsei se eis chōran megalēn kai ametrēton, kai ekei apothanē; kai thēsei to harma sou to kalon eis atimian kai ton oikon tou archontos sou eis katapatēma,

nā'weh

エルサレムのおとめたちよ わたしは黒いけれども愛らしい。ケダルの天幕、ソロモンの幕屋のように。(雅 1:5)

MT: š^ehōrah 'anī w^enā'wāh b^enôt y^erûšālāim k^e'oh^elē qēḏār kīrī'ôt š^elōmōhb:

LXX: Melaina eimi kai kalē, thygateres lerousalēm, hōs skēnōmata Kēdar, hōs derreis Salōmōn.

nā'îm

彼女の道は喜ばしく 平和のうちにたどって行くことができる。(箴 3:17)

MT: d^erākêhā ḏarkê-nō'am w^ekol-n^etībôtêhā šālôm:

LXX: hai hodoi autēs hodoi kalai, kai pantes hoi triboi autēs en eirēnē;

LXXにおける kalos の使用総数 221 回の内、h^amûdôt、yāšār、kābôd、nā'weh の訳として kalos が使われるのは、それぞれ 1 回ずつ、また、nā'îm では 6 回である。また、yāpeh の訳として使用されるのは 31 回であり、tôb の訳としては、残りのほとんどが使用されている。

次に kalos に訳されることの多い二つのヘブライ語、tôb と yāpeh を取り上げ、kalos がどのような意味として使用されているかを見る。

2-2-1. tôb と kalos

tôb は「良い」、「善」、「幸い」、「恵み」、「美しい」など、非常に広い意味を持つ

ことばであり、約 40 個のギリシア語がその訳にあてられている。その中で、最も多く置き換えられるのが *agathos* である。また、*agathos* の半分以下ではあるが、他の語に比べ格段に使用回数が多いのが *kalos* である。

kalos は「長寿を全うして」(創 25:8)、「立派な家」(申 8:12)、「恵みの約束」(ヨシュ 21:45)、「彼には幸いがあった」(エレ 22:15)、「主が約束された良いこと」(ヨシュ 23:15) などに使われる。

また、「善悪の知識の木」(創 2:9)、「主の目にかなう正しいこと」(申 6:18) というように、倫理的な意味合いにおいて使用される。

これらの箇所では、*kalos* は *agathos* の同義語として使用される。また *agathos* と同様に、*ṭōb* の翻訳としての *kalos* は、その多くが倫理的な意味で使用される。

2-2-2. *yāpeh* と *kalos*

yāpeh は「美しい」ことを指すことばである。それは物を指す時もあるが、一般に人の外観の美しさを述べる時に使用される。この *yāpeh* の訳には、*kalos* がしばしば用いられる。一方、*yāpeh* において *agathos* が使用される箇所は一箇所のみである⁹。

yāpeh の訳として、*kalos* は次のように使用される。

アブラムがエジプトに入ると、エジプト人はサライを見て、大変美しいと思った。(創世記 12:14)

MT: way^hî k^hô' 'abrām miṣrāy^mmāh wayyir'û hammiṣrîm 'eṭ-hā' iṣṣā kî-yāpāh
hiw' m'ōd:

LXX: egeneto de hēnika eisēlthen Abram eis Aigypton, idontes hoi Aigyptioi
tēn gynaika hoti kalē ēn sphodra,

その他、*kalos* はラケル (創 29:17)、エステル (エス 2:7) などのように、女性の美しさや素晴らしさ、優れているさまを形容する時に使用される。また、ヨセフ (創 39:6) のように、*kalos* は女性だけではなく、男性にも使用される。また、雅歌には、

恋人よ、あなたは美しい。(雅 4:1)

MT: hinnāk yāpāh ra'yāfî

LXX: Idou ei kalē, hē plēsion mou,

というように、恋人に対して 8 回使用されている¹⁰。以上の箇所においては、

いずれも、「外面が美しい」という意味で使われる。また、「つややかな、よく肥えた七頭の雌牛」(創 41:18) の「つややか」のように動物にも使用される。

以上の箇所では、古典ギリシア語同様、kalos が肯定的に使われている。

3. LXX における kalos の使用法の特徴

3-1. 否定的な意味

一方、kalos の名詞形、kallos には、以下のように使われるものもある。

あでやかさは欺き、美しさは空しい。主を畏れる女こそ、たたえられる。(箴 31:30)

MT: šeqer haḥēn w^oheḥel hayyōpî 'iššā yir'at-yhwh hî' tîḥallāl:

LXX: pseudeis areskeiai kai mataion kallos gynaikos; gynē gar synetē eulogeitai, phobon de kyriou hautē aineitō.

知恵に富み、聡明で、神を畏れる妻が幸いをもたらすのに対し、空しさや災いをもたらす女を形容するものとして kallos が使用される。さらに、次のようにも記される。

彼女の美しさを心に慕うな。そのまなざしのとりこになるな。(箴 6:25)

MT: 'al-taḥmōd yopyāh bilḥāḇekā w^o'al-tiqqāḥ^akā b^e'ap' appēhā:

LXX: mē se nikēsē kallous epithymia, mēde agreuthēs sois ophthalmois mēde synarpasthēs apo tōn autēs blepharōn;

ここでは、悪い女、異邦の女、遊女を形容するものとして kallos が使われている。以上の箇所では、美しさが、肯定的というよりも、むしろ否定的にとらえられている。また、エゼキエル書には、次のようにも記される。

それなのに、お前はその美しさを頼みとし、自分の名声のゆえに姦淫を行った。(エゼ 16:15)

MT: wattibṭ^aḥî b^yopyēk wattiznî 'al-š^emēk wattišp^ekî 'et-taznūtayik 'al-kol-'ōḇēr lō-yehî:

LXX: kai epepoitḥeis en tō kallei sou kai eporneusas epi tō onomati sou kai execheas tēn porneian sou epi panta parodon, ho ouk estai.

このエゼキエル 16 章は、滅亡の危機に瀕しているイスラエルを前にし、エルサレムを「背信の妻」として語る物語である¹¹。ここにおいては、民が、主なる神によって女王のように美しく装われたことを忘れ、美しさを自分のよりどころとするなら、美しさは罪の源となるということが語られる。ここでは、神の賜物であり、また罪の源ともなるものを表すものとして kalos が使われている。このエゼキエル書にみられるように、LXX において kalos が「美しい」という意味で使用されるとき、しばしば罪との関連において述べられる。

以上見てきたように、これらの箇所においては、kalos は否定的役割を果たしている。すなわち、以上の箇所では、Grundmann が述べるように、kalos の審美的な側面は大きく退いているといえよう。

3-2. 肯定的な意味

3-2-1. 「救い」との関連

他方、ゼカリヤ書においては、次のように使用される。

それはなんと美しいことか なんと輝かしいことか。(ゼカ 9:17)

MT: kî mah-tûbô ûmah-yopyô

LXX: hoti ei ti agathon autou kai ei ti kalon par' autou,

ここで「美しい」に使用されているのは、tûbでありその訳の agathos である。また、「輝かしい」に使われているのが yâpeh でありその訳の kalos である。そして、この節の直前には、次のように記されている。「彼らの神なる主は、その日、彼らを救い その民を羊のように養われる。彼らは王冠の宝石のように 主の土地の上で高貴な光を放つ」(ゼカ 9:16)。9 章は、ろばに乗る平和の王の到来に続き、神による民の救いの預言がなされる箇所である。平和の王が到来し、救いが実現するとき、民は光を放ち、まばゆいばかりに輝く。ここでは、agathos と kalos が並列され、共に「救いを受ける者の姿」を表すことばとして使用されている。

さらに、名詞 kallos は以下の箇所でも使用される。

乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように この人は主の前に育った。
見るべき面影はなく 輝かしい風格も、好ましい容姿もない。(イザヤ 53:2)

MT: wayya'al kayyônēq l'pānāyw w'kaššōreš mē'ereš šîa lō'-tō'ar lô w'lō' hādār
w'nir'êhû w'lō'-mar'eh w'nehm'qêhû:

LXX: anēggeilamen enantion autou hōs paidion, hōs rhiza en gē dipsōsē,
ouk estin eidos autō oude doxa; kai eidomen auton, kai ouk eichen

eidos oude kallos;

ここは、苦難の僕をうたった箇所である。人々の病、痛み、そして罪を負い、執り成しをする苦難の僕を預言した、非常に重要な箇所において、kalos が使用されている。

これらの文脈において使用されることで、前者では kalos は agathos と共に、そして、後者では kalos のみで、救いと関連する重要な役割を持つことばとして使用されていると考えられる。

3-2-2. 「真」との関連

Grundmann は、預言者において使用されるときも、kalos は倫理的な意味で使われると述べる¹²。ミカの 6:1-8 には、犠牲の祭儀と神の求められる行為とが鋭く対比して述べられている。その中でミカは、犠牲の祭儀が「偽りのもの」、「形式的なもの」となっていることを激しく非難する。その最後の節は以下のように記される。

人よ、何が善であり 主が何を前にお求めておられるかは 前にお告げられている。正義を行い、慈しみを愛し へりくだって神と共に歩むこと、これである。(ミカ 6:8)

MT: higgîd l'kâ 'ādām mah-tôb ūmāh-yhwh dōrēs mimma'kā kî 'im-'āsōt mišpāt
w'ah'baṭ ḥesed w'hašnēa' leket 'im-'lōhēkā:

LXX: ei anēggelē soi, anthrōpe, ti kalon? ē ti kyrios ekzētei para sou all' ē tou poiein krima kai agapan eleon kai hetoimon einai tou poreuesthai meta kyriou theou sou;

この、「何が善か」の、「善」が kalos であり、倫理的な意味で kalos が使用されている。

ところで、この箇所は社会批判の預言の箇所であり、ここにおいてミカは上層階級による圧制や、正義の破壊を嘆く。そして、ミカに見られる「祭儀の宗教を批判し、正義や愛の実践をその宗教の核心に据える思想は、アモス、ホセアらにも共通するもの」¹³ である。それは、またイザヤにも通ずるものと考えられる。アモスは次のように記す。

悪を憎み、善を愛せよ また、町の門で正義を貫け。あるいは、万軍の神なる主が ヨセフの残りの者を 憐れんでくださることもあろう。(アモス 5: 15)

MT: śin'û-rā' w'ehēbū tōb w'haṣṣīgū bašša'ar mišpāt 'ūlay yeḥnan yhw
'lōhē-ṣēbā'ōt š'erīt yōsēp:

LXX: Memisēkamen ta ponēra kai ēgapēkamen ta kala; kai apokatastēsate
en pylais krima, hopōs eleēsē kyrios ho theos ho pantokratōr tous
perilopous tou lōsēph.

この後、アモスは神が祭りを退け、献げ物をも喜ばれないことを預言する。また、イザヤも次のように告げる。

11 お前たちのささげる多くのいけにえが わたしにとって何になるのか、と主は言われる。…17 善を行うことを学び 裁きをどこまでも実行して 搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り やもめの訴えを弁護せよ。(イザ 1:11, 17)

MT: lāmmā-lī rōb-zibhēkem yō'mar yhw(11)…limdū hētēb diršū mišpāt 'ašš'arū
hāmōš šiptū yātōm rībū 'almānāh:(17)

LXX: ti moi plēthos tōn thysiōn hymōn? legei kyrios;(11)…mathete kalon
poiein, ekzētēsate krisin, rhyasthe adikoumenon, krinte orphanō kai
dikaiōsate chēran;(17)

イザヤは、献げ物も神には喜ばれず、祭りは重荷となり、汚れた手でなす祈りは聞かれることはないと言っている。

上記の箇所においても、「善」と訳されたことばに使われているのが kalos である。また、kalos ということばはないが、いけにえの献げ物との関連で、ホセアも次のように、同様の預言をする。

わたしが喜ぶのは 愛であっていけにえではなく 神を知ることであって
焼き尽くす献げ物ではない。(ホセ 6:6)

MT: kī ḥesed ḥāpaštī w'lō'-zābāḥ w'ḏa'at 'lōhīm mē'ōlōt:

LXX: dioti eleos thelō kai ou thysian kai epignōsin theou ē holokautōmata.

ところで、ミカにおいて、kalos の内容は「正義」、「慈しみ」、「へりくだり」であった。これらの三つのことば、すなわち「正義」(mišpāt)、「慈しみ」(ḥesed)、「へりくだり」(haṣnā')は、聖書において大変重要な意味を持つことばである。Schmidt は、「正義を行うこと」はアモスに、「慈しみを愛すること」はホセアに、そして「高ぶることなく神の前を歩むこと」はイザヤに対応することを示唆する¹⁴。ミカの預言のことばは、アモス、イザヤ、さらにはホセアらの思想が凝縮された

ものであるといえよう。

さらに、これら預言者による、偽りの礼拝を批判する文脈においては、*kalos* に内包される、もう一つの意味が考えられるのではなかろうか。悪に善が対立するように、偽りに対立するもの、それは真である。「真」、それは、「混じりけのない」「本物の」「純粋な」とも言い換えられるであろう。この真を、神は求められ、喜ばれる。

すでに 1-2. で見たように、*kalos* は、「偽物でなく、混じりけのない、純粋な」という意味で使用されていた。すなわち、*kalos* は偽りのないもの、すなわち「真」の意味をあわせもつ。一方、こういった意味は、*agathos* には見受けられない。

このミカの箇所において、*kalos* は倫理的な意味として使用される。それと共に、預言者らの重要なことばが凝縮されたこの箇所に使われることで、*kalos* がもともともつ「真」が深まったといえるのではないか。その深まりとは、神が求め、喜ばれるものとしての真である。そして、ここで示された「真」は同義語の *agathos* にはない、LXX における *kalos* の重要な意味の一つと考えられるのである。

3-2-3. 「神の喜び」との関連

tôb が *kalos* と訳される場合に、その多くが、倫理的な意味を表すことは述べたとおりである。そのような中で、非常に興味深いのが次の箇所である。

神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。(創 1:31)

MT: wayyar 'elôhîm 'et-kol-'ašer 'āsāh w'hinnê-*tôb* m'e'ôd way'hî-'ereb way'hî-*bôqer* yôm haššišî:

LXX: kai eiden ho theos ta panta, hosa epoiēsen, kai idou kala lian. kai egeneto hespera kai egeneto prōi, hēmera hektē.

神がそれぞれの被造物を造られたとき、それらを「見て、良しとされ」(創 1:4,10,12,18,21,25)、また、全てのものを造り終え、全てをご覧になった時、「見よ、それは極めて良かった」(1:31) ことが描かれている。この「良い」に使われているのが *kalos* である。この「良い」は、どういう意味なのであろうか。

von Rad は、この箇所について次のように述べる。「存在を与えられた被造物は、『*tôb*』(ルター訳では「良い」)なのである。この語が意味しているのは、美的判断というよりも、或る物が合目的性を持つということ、ふさわしい物であるということである」¹⁵。この箇所における「良い」は、倫理的に良いというのではなく、ふさわしいことを表すと述べる。

一方、Brueggemann は、「ここで用いられている『良い』という言葉は、もともと道徳的な質と関係しているのではなくて、審美的な質と関係している。それはむしろ、『美しく心ひかれる、目を楽しませる、美しい』というように訳される方が良いかもしれない」¹⁶と述べる。さらに、神は「造られたものに満足を憶え、喜びを見出された」¹⁷とも記す。Brueggemann もまた、倫理・道徳的に良いのではないことを述べるが、彼は、「良い」は、ふさわしさではなく、美しさや満足、喜びであることを示唆する。

ところで、kalos は以下のように、nā'im の訳としても使用される。nā'im は、6つのギリシア語に訳され、agathos にも訳されるが、その中で、もっとも回数が多いのが kalos である。

主を賛美せよ、恵み深い主を。喜ばしい御名をほめ歌え。(詩 135:3)

MT: hal'lu-yāh kī-tôb yhwh zamm'ru lišmô kī nā'im:

LXX: aineite ton kyrion, hoti agathos kyrios; psalate tō onomati autou, hoti kalon;

また、nā'im の名詞形 nō'am では以下のようにも使用される。

彼女の道は喜ばしく 平和のうちにたどって行くことができる。(箴3:17)

MT: d'rākēhā ḏarkē-nō'am w'kol-n'tîbôtēhā šālôm:

LXX: hai hodoi autēs hodoi kalai, kai pantēs hoi triboi autēs en eirēnē;

これら nā'im、nō'am の訳として kalos が使われており、「喜ばしい」という意味を表している¹⁸。

ところで、Muff は tōb のルートである twb が「良さ」を表すということを確認した上で、「しかし、これは誤解を招きやすい。なぜなら twb ということばは、道徳・倫理的な性質を取り扱うことはほとんどないからだ。・・・tōb は満足、または喜びの概念を表すのである」¹⁹と述べる。

さらに、Beyreuther は「agathos はより、倫理的な適用を示唆する。一方、agathos に比して、kalos は主を喜ばせるもの、彼が好きなもの、彼に喜びを与えるものである」²⁰と述べる。

創世記で使われているのは tōb であり、kalos である。創造物語における kalos は、倫理・道徳的意味ではなく、von Rad が言うように、「合目的性を持つ」、「ふさわしい」という意味にもとれるであろう。しかし、それ以上に、Brueggemann が述べるように、「美しい」と共に、「喜び」、「神の喜び」の意味が大きいのでは

ないか。「神の喜び」は、LXXにおける kalos の重要な意味であると考えられる。

4. LXX における kalos と、「イエスに香油を注いだ女」の物語

前述した新約聖書における「イエスに香油を注いだ女の物語」(マルコ 14 章 3-9 節、マタイ 26 章 6-13 節)において、その女の行為に対し、憤慨する人々とは異なり、イエスは「わたしに良いことをしてくれたのだ」と告げ、賞賛のことばを述べる。そして、この「良いこと」に使われるのが kalos である。

従来、この箇所における kalos は、現代語訳聖書や注解書等において、大きく二つに訳されてきた。その一つが、「良いこと」であり、例えば、good service(NSRV)、guten werken(Pesch)、よい事(口語訳)などである。そして、もう一つが「美しいこと」であり、例えば、beautiful thing(NIV)、schönes Werk(Schlatter)などである。

ところで、Perkins は「NIV は、kalos というギリシア語を、一般的にその語のもつ『高潔な』や『よい』といった、倫理的な意味ではなく、美的な意味にとらえ、その結果、イエスが賞賛したその核心をつかみ損ねている」²¹と述べる。確かに、Perkins が述べるように、この箇所において、単に美的な意味で kalos が使われているとは考えにくい。Perkins が指摘するように、あるいは、本稿が確認したように、古典ギリシア語において、また、LXX においても、kalos には倫理的意味があり、その意味で使用されることが多いのである。

しかしながら、3-2. で示されたように、数は少ないものの、LXX において、「救いの到来」、「真の礼拝」、「創造」といった大変重要な文脈で kalos は使われており、そこでは「救われたものの姿」「神の求める真」「神の喜び」などの意味を持つ。その kalos が、この「香油を注いだ物語」の中に置かれていることに、積極的な意義を見出すべきではないか。この箇所における kalos は、単に美的意味でもなく、また、単に倫理的意味でもなく、「まことを尽くしてくれた」というように、「真」という意味で使用されているのではないか。その女の「真」、「真心を尽くす」行為をイエスは賞賛していると考えられるのである。すなわち、上記福音書の物語における kalos は、LXX におけるその使用方法に注目してこそ、明らかになる意味を含んでいると考えられるのである。

おわりに

以上、agathos との対比をまじえながら LXX における kalos の使用法を検討した。1 章では、古典ギリシア語の使用法を概観し、思想や哲学における kalos の重要性について述べた。2 章では、LXX においては、agathos に比して、kalos の使用回

数が大幅に減少していることを確認した。kalos が訳語として使用されるヘブライ語の中から *tôb* と *yāpēh* を取り上げ、*tôb* においては、その大部分が *agathos* と同義的に使用されること、また、倫理的な意味合いが強いことを述べた。3 章では LXX における kalos の用法の特徴を考察し、kalos はしばしば罪との関連で使用され、否定的な意味があることを確認した。一方で、*yāpēh* の訳である kalos には、救いと関連する重要な役割があることがわかった。また、主にミカ書において、kalos は倫理的な意味合いを持つと共に、「真」の意味の深まりが見られることを述べ、さらに、*agathos* との違いに触れた。最後に創世記を通して、kalos は「神の喜び」につながることを示した。4 章では、香油を注ぐ物語における kalos が、従来捉えられているように、単に美的意味でも、倫理的意味でもなく、「真」という意味を持ち、その語義から物語を解釈することの重要性を指摘した。

以上の考察を通し、Grundmann が述べているように、LXX においては kalos の役割や意味が乏しくなった点が多々あることが確認される一方で、kalos は、箇所としては多くはないものの、救いの到来、真の礼拝、創造という大変重要な内容を持つ文脈において使用されており、また「救われたものの姿」「真」「神の喜び」につながる豊かな内容を持つことばであることがうかがえた。LXX においても重要な役割がある kalos はまた、新約聖書の香油を注ぐ場面においても、LXX での用法に則した積極的な意義を持ち得ることが示唆された。紙幅の関係で、上記福音書の物語の解釈を十分に展開できたとは言い難いが、本稿では LXX で kalos に注目することの重要性を指摘するに留め、その展開は今後の課題としたい。

註

*この論文は、2017年3月27日の日本基督教学会近畿支部会（於：関西学院大学）での研究発表に修正・加筆したものである。

¹ Cf. W. Grundmann, “*kalos*,” pp. 536-537, Kittel, Gerhard. ed. Bromiley, G. W. trans. and ed., *Theological Dictionary of the New Testament III*, Grand Rapids, Michigan: W. B. Eerdmans, 1964-1976.

² Cf. H. G. Liddell, and R. Scott, com. *A Greek-English Lexicon*, Rev. and augm. throughout by S. H. S. Jones; with the assistance of R. McKenzie; and with the cooperation of many scholars, Oxford: Clarendon Press, 1996, p. 870.

³ Cf. H. G. Liddell, and R. Scott, *Ibid.*, p. 870. このうち、Xenophon のことばに関しては、E. C. Marchant, *Xenophon Memorabilia and Oeconomicus*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press Boston, 1953 をテキストとし、クセノポン、内山勝利訳『ソクラテス言行録 1』京都大学学術出版会、2011 年を参照して私訳を試みた。

-
- ⁴ Cf. Grundmann, *op. cit.*, pp. 538-539.
- ⁵ I. Burnet, *Platonis Opera II*, Great Britain: Oxonii, 1960, 249d.
- ⁶ Cf. E. Beyreuther, “kalos,” Colin Brown, general ed., *The New International Dictionary of New Testament Theology*, Vol.2, Grand Rapids, Michigan: Zondervan Pub. House, 1975-1978, p. 103.
- ⁷ Grundmann, *op. cit.*, p. 543.
- ⁸ Alt, A., Eissfeldt, O., Kahle, P. ed. Kittel, R., *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1967. Rahlfs, Alfred. ed. *Septuaginta*, 2nd ed., Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006. 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳—旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1991年。
- ⁹ 「ヨブの娘たちのように美しい娘は国中どこにもいなかった。」(新共同訳ヨブ記 42:15)
- ¹⁰ 雅歌において kalos が恋人に使用される箇所は、以下のとおりである。雅歌 1:15a,15b,16,10,13,4:1a,1b,6:4.
- ¹¹ 石川康輔他編集『新共同訳 旧約聖書注解Ⅱ ヨブ記—エゼキエル書』日本基督教団出版局、1994年、538-541頁参照。
- ¹² Cf. Grundmann, *op. cit.*, p. 544.
- ¹³ 石川康輔他編集『新共同訳 旧約聖書注解Ⅲ ダニエル書—マラキ書; トビト記—マナセの祈り』日本基督教団出版局、1993年、130頁。
- ¹⁴ W. H. シュミット、木幡藤子訳『旧約聖書入門 下』教文館、2003年、86頁参照。
- ¹⁵ G. フォン・ラート、山我哲雄訳『ATD 旧約聖書註解 1 創世記 1-25 章 18 節』ATD・NTD 聖書註解刊行会、1993年、69頁。
- ¹⁶ W. ブルッグマン、向井考史訳『現代聖書注解 創世記』日本基督教団出版局、1986年、77-78頁。
- ¹⁷ 同上、78頁。
- ¹⁸ Grundmann は前掲書 544 頁に、Lust は *Greek-English Lexicon of the Septuagint* (p. 303) に おいて、また Muraoka は *A Greek-English lexicon of the Septuagint* (p. 360) に おいて、kalos の意味である「喜ばしさ」「麗しさ」について触れている。Cf. Takamitsu Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*, Louvain: Peeters, 2009. J. Lust, *Eynikel, E. Hauspie, K. Greek-English Lexicon of the Septuagint*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2003.
- ¹⁹ Y. Muffs, *Love & Joy—law, language and religion in Ancient Israel—*, Cambridge: Harvard University Press, 1992, p. 2.
- ²⁰ E. Beyreuther, *op. cit.*, p. 103.
- ²¹ P. Perkins, “The gospel of Mark,” *The New Interpreter's Bible VIII*, Nashville: Abingdon Press, 1994, p. 698.